ジャズの巨人たち①　クリフォード・ブラウン

25歳の若さで散った不世出のトランペッター

編集部の新たな方針のもと、ポピュラー音楽部門のディスク紹介を担当させていただくことになった。

ポピュラー音楽といっても範囲（カテゴリー）は広い。当然ながら新吹込作もあれば、再発売される旧作もある。編集氏の要望はいわゆる「名盤」を中心に、ということだった。ジャズを例にとれば、20世紀の最も偉大な音楽文化としてのジャズの歴史を創造してきた幾多の巨人たちの演奏こそがジャズ史の1ページであり、それはその時、その時代に、彼らが残した記録（音源）を通してしか理解し得ない。再現芸術であるクラシック音楽と、一回性の即興芸術であるジャズとの決定的違いがそこにある。ベートーヴェンの偉大性は楽譜を通し、現代の演奏家によってそのつど再現される。一方、ジャズでは楽譜は便宜的なものだ。デューク・エリントンやチャーリー・パーカーがなぜ偉大なのかは彼ら自身の遺産を通してしか把握できない。

ところが、これら巨人たちの演奏に触れる機会は今日では極端に少なくなってしまった。あといくらもしないうちに、レスター・ヤングもセロニアス・モンクさえもみな歴史の彼方に埋没してしまうのではないかと危惧する筆者にとって、「名盤」の紹介に主眼をおきたいとの編集氏の要望は我が意を得たものだった。もちろん現代の演奏に門戸を閉ざすわけではないが、当面はジャズを中心に、ディスク・カタログに載っている往年の秀演、わけても歴史上名高いグループおよび巨人たちの定評ある「名作」や座右に置くべき「名盤」をとりあげていくことにしたのは、以上に述べた理由によっていることをご理解いただきたい。

*

かれこれ30年ほど前になるが、来日した米ジャズ・グループのベース奏者が、案内したレコード店で慨嘆してみせたことがあった。その時彼はあるレコード（LP）を指さしてこう言ったのだ。「日本はすばらしいねえ。アメリカじゃどんなに偉大なミュージシャンだろうと、死んでしまったらすぐに忘れられる。偉大な演奏家を忘れないこの国のファンには敬意を表するよ」と。

彼が指差した壁際に飾ってあったのは**クリフォード・ブラウン**のエマーシー吹込盤だった。

クリフォード・ブラウンといえば、モダン・ジャズ黄金時代のとびらが開いた50年代半ば、名ドラマーのマックス・ローチと双頭で組んだクィンテットでファンを魅了した輝かしい名トランペット奏者である。あのマイルス・デイヴィスが自分より後輩のトランペット奏者で一目置いたのはブラウンだけだった。

月刊「音楽鑑賞教育」2002年8月号から　ONKANウェブネット https://onkan-web.net/

悠　雅彦（音楽評論家）

《ヘレン・メリル・ウィズ・クリフォード・ブラウン》

日の出の勢いでジャズ界をのぼりつめつつあった56年6月26日、ブラウニーの愛称で誰からも愛されたそのブラウンを、思い出したくもない悲劇が襲った。シカゴに向かう高速道路での自動車事故のため、同乗していたピアニストのリッチー・パウエル夫妻とともに他界したのだ。わずか25歳だった。最良の友を失って、ローチもテナーの巨人ソニー・ロリンズもあまりの失意のためにしばらくは演奏することができなかった。10数年前、ロリンズは「いま誰にいちばん会いたいか」という私の問いに間髪を入れず答えた。「クリフォードだ、あのクリーン（麻薬をやらない）なクリフォード・ブラウンだ」。故ディジー・ガレスピーは「取り返しがつかない損失だ」と悲痛な声をあげた。実際、ブラウンを超えるトランペット奏者はいまだに現れていない。破格の天才トランペッターというべきだ。

*

ブラウンの吹込の中で人気の高いブラウン＝ローチ・クィンテットの演奏（エマーシー盤）が今月、3枚、再発売された。

(1)クリフォード・ブラウン＝マックス・ローチ（UCC M-9053）54-8~55-2
(2)ブラウン＆ローチ・インコーポレイテッド（UCCM-9055）54-8
(3)スタディー・イン・ブラウン（UCCM-9052）55-2
(4)アット・ベイズン・ストリート（UCCM-9054）56 -1~2

演奏順に並べたが、内容的にはどれもすばらしい。ことブラウンに限っては、豊かな音量を誇る輝かしいトーン、滑るように次々と紡ぎ出されるインプロヴィゼーションの創意豊かなフレーズ、そして旋律を歌うことにかけては他の追随を許さない歌心といった、彼の図抜けた才能が上掲4枚のCDすべてで堪能できる。(2)が名盤の誉れ高いのは、ハロルド・ランドのテナー、パウエルのピアノ、ジョージ・モロウのベースらとのバランスがスムースで、絶妙な奏法でリードするローチのドラミングと相まって全編に居心地のよい快感（スリル）を生んでいるからである。(3)ではテナーがロリンズに替わる。だが、このグループには中堅のランドの方が似つかわしいのもジャズの面白さだ。

“ニューヨークの溜息”で有名なヘレン・メリルの最高傑作『ウィズ・クリフォード・ブラウン』（UCCM-9051）も同時に再発売された。このヴォーカルを縫って流れるトランペットには何度聴いても目頭が熱くなる。21歳の若きクインシー・ジョーンズによる編曲も出色。